

# 『キターブ・バフリエ』に見える祈りの場

新 谷 英 治

## Place for Prayer described in the *Kitâb-i Baḥrîya*

SHINTANI Hideharu

In the *Kitâb-i Baḥrîya*, a navigation book for the Mediterranean Sea compiled by Pîrî Ra'îs at Gallipoli under the Ottoman Empire in the 16th century, we find the words *Khidr-Îlyâs/ Khidr-Îlyâslıq* repeated several times. *Khidr-Îlyâs* comprises *Khidr (al-Khidr)* and *Îlyâs (Elias/Elijah)* and embodies both of their characteristics as protectors of people on both sea and land. Over a wide scope, from the Indian Ocean to the Mediterranean Sea, numerous venues for prayer related to the *Khidr-Îlyâs* have been reported by scholars. What do the words *Khidr-Îlyâs/ Khidr-Îlyâslıq* mean in the *Kitâb-i Baḥrîya*? In the course of seeking clues to answer this question, I investigated the three sites of *Khidr-Îlyâs* described in the *Kitâb-i Baḥrîya* in Greece (the islands of Lesbos, Leykada and Milos) in the summer of 2017.

キーワード：『キターブ・バフリエ』（*Kitâb-i Baḥrîya*） ヒドウル・イルヤース（*Khidr-Îlyâs*） ギリシア（Greece） 祈りの場（place for prayer）

## はじめに

16世紀前半にオスマン朝治下のガリポリでピーリー・ライース Pîrî Ra'îs によって編纂された地中海航海案内書『キターブ・バフリエ』*Kitâb-i Bahrîa* には、ヒジュラ暦927年本系写本、同932年本系写本いずれにおいても、ヒドゥル・イルヤース *Hıdır/Khıdır [Khıdır] -İlyâs* あるいはヒドゥル・イルヤースルク *Hıdır/Khıdır [Khıdır] -İlyâşlıq* なる表現が現れる。

ヒドゥル・イルヤースは、本来 *Khıdır-İlyâs* と綴られ、現代の共和国トルコ語では *Hızır-İlyas, Hidrellez* とともに記される。アル・ヒドゥル *al-Khıdır* (アル・ハディル *al-Khađîr*) とイルヤース *İlyâs* の特性が一体になって海上、陸上の守護者とみなされたものである。イスラーム教徒の間ではアル・ヒドゥルは生命の水を見つけて飲んだと考えられており、それ故に不死とみなされている。カッパドキア (アナトリア) での龍退治で知られる聖ゲオルギオス *Άγιος Γεώργιος/Agios Georgios* とも深く関連付けられている。イルヤースは聖者 *Elias (Elijah)* のことであり、古代イスラエル民族の預言者である。アル・ヒドゥルとイルヤース両者が混同され一体的にヒドゥル・イルヤース *Khıdır-İlyâs* と呼ばれることもあり、関連した地名や施設がインド洋から西アジア、地中海の各地で知られる<sup>1)</sup>。

現在のトルコを中心にした地域では、11月7日に至るまでの夏季の始まりに当たるとされる5月5日・6日に行なわれる祭りを *Hidrellez* と呼んでいる。5月5日・6日は聖ゲオルギオス祭 (4月23日) に、また11月7日は聖デメトリウス祭 (10月26日) に対応している [“*Khıdır-Ilyâs*”, by Boratav, P.N. in *ET*<sup>2</sup>]。

接尾辞 *-lıq* の付されたヒドゥル・イルヤースルクなる語は、『キターブ・バフリエ』932年本第11章 (*Focha/İzmîr* 他) において

この瀬戸はヒドゥル・イルヤース *Hıdır [Khıdır] -İlyâs* の瀬戸と言う。というのは、この小島に崩れた建物があって、その建物をヒドゥル・イルヤースルク *Hıdır [Khıdır] -İlyâşlıq* と言うからである。 [*Ayasofya2612/75b14-15*]

と述べられ、また第201章 (*Değirmenlik/Milos*) において、

船が停泊するところはその瀬戸の中央であるからである。正面に荒れた教会堂がある。その教会堂をアヤー・ユールキー *Ayâ Yürki* — ヒドゥル・イルヤースルク *Hıdır [Khıdır] -İlyâşlıq* の意味である — [と言う] [*Ayasofya2612/414a7-9*]

1) Ocak2012 (1990)、家島2006、村山2007などの考察、調査報告を参照。なお、ヒドゥル、イルヤース、あるいはヒドゥル・イルヤース信仰と深い関わりがあるとみられる聖ゲオルギオスへの信仰については伊藤一郎や菅瀬晶子の一連の論考を参照のこと。

との記述があるところを見ると、建物特に教会堂をさす言葉として用いられているように思われる。

このように『キターブ・バフリエ』に見えるヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクは祭りとしての *Hidrellez* 及びそれに関連した事柄を指している可能性も考慮しなければならないが、用例から知られる限りでは直接的に「祭り」や「祭りの場」を指しているとは考えにくいようにも思われる。

ヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクは『キターブ・バフリエ』においては、932年本系 *Ayasofya2612* 写本で確認され得る限り、第10章 (*Midillü/Lesvos*)、第11章 (*Focha, İzmir* 他)、第58章 (*Ayâ Mawrî/Leykada* と *Pirawaza/Preveza*)、第174章 (*Shâm Tarabûlûsî/Tripoli*)、第201章 (*Değirmenlik/Milos*) に見える<sup>2)</sup>。これらの5地点は現在の国名で言えばトルコ (フォチャ *Foça* 近傍)、レバノン (トリポリ *Tripoli* 沖)、ギリシア (3地点: レスヴォス *Lesvos* 島南西部、レフカダ *Leykada* 島近傍、ミロス *Milos* 島東北沖) である。『キターブ・バフリエ』932年本の本文ではシリア海岸からイベリア半島に至る地中海世界全域が広く扱われ、簡潔な表現ながら沿岸諸地域や島嶼各地について比較的詳細な叙述がなされているが、上の5地点以外ではヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクが明示的に言及される例は無い。

ただ、*Ayasofya2612* 写本には *Ayâ Yûrkî / Ayâ Kirkî / Ayâ Kirâkî* といった表現が現れることには注意が必要である。本文では、第192章 (イブリス海岸とマグリエ [Fethiye] 港の章) で教会堂を指して *Ayâ Yûrkî* と書かれており (付図では *Ayâ Kirâkî* か)、第10章 (*Midillü/Lesvos*) の「ヒドゥル・イルヤースという小島」の上の教会堂を「*Ayâ Yûrkî* と言う」との記述や第201章 (*Değirmenlik/Milos*) の「その教会堂をアヤー・ユールキー *Ayâ Yûrkî* — ヒドゥル・イルヤースルク *Hıdır [Khidr] -İlyâshq* の意味である — [と言う]」との表現に照らして、これらの教会堂がヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクに関わりがあることは確実と思われる。また、*Ayâ Kirkî* (第23章: *Îlriyûs/Leros* 島) や *Ayâ Kirâkî* (第57章: *Kifâlûnya/Kefalonia* 島) といった表記も見られ、これらも聖ゲオルギオス *Agios Georgios* の音を反映しているとするヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクと深い関わりを有している可能性がある。他にも *Ayâ/Ayû* などが冠される地名・施設名の中にヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクと関わりのあるものがある可能性があるが、上で触れた第192章の例を仮に考慮に入れるとすればヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクへの言及は『キターブ・バフリエ』*Ayasofya2612* 写本本文では少なくとも6箇所となる。

2) *Ocak2012* (1990): 133では第10章と第58章の2例に言及がある。

また Ayasofya2612 写本本文では言及されないが付図で Ayâ Kirkî などの表記が現れる場合もあり、第198章 Şântûrûn/Santrini 島 [411a]、第199章 Ayna/Ios 島 [411b]、第200章 Bûlikandira/Folegandros 島・Sî Qandira/Sikinos 島 [413a] の3例が確認できる。ただし、第198章本文では Ayâ Yirîne であり、付図が誤っている可能性がある。また第200章付図にある Ayâ Kirkî は第199章付図の Ayâ Kirkî と同じものである。それ故「本文では言及されないが付図には Ayâ Kirkî などの表記が現れる場合」というのは第199章のみとなる。なお第44章 Mûkana/Mykonos 島の付図 [136a] には Şân Jurjî が現れる。これも聖ゲオルギオスと同義だとすれば第199章付図の Ayâ Kirkî とあわせて2例となる。

『キターブ・バフリエ』の写本の付図には参照された情報や作製者に関わる特有の問題があると考えるので、ここでは Ayasofya2612 写本付図に現れる関連表現は考察の対象外とし、また写本本文に Ayâ Yürki / Ayâ Kirkî / Ayâ Kirâki などといった表現で現れるものも機会を改めて検討することとする<sup>3)</sup>。

なお、Ayasofya2612 写本では、Şân Niqûlâ のように Şân が冠される地名や教会堂など、及び Şânta Mariya のように Şânta が冠される地名や教会堂などがそれぞれ70件前後現れており、これらの中にも聖ゲオルギオスの場合のようにヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクに関わりのあるものが存在する可能性がある。それらの名称も考慮に入れて総合的に分析する必要があると考えているが、これも後日を期すこととし、本稿では『キターブ・バフリエ』本文にヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクの語で明示的に言及されている場合のみを取り上げて検討する。

『キターブ・バフリエ』Ayasofya2612 写本本文で明示的に言及されるヒドゥル・イルヤース関連の記述は上で述べた通り5件にとどまり、決して多くはない。一瞥するところ教会堂に関連した表現が現れることが多いように思われるものの、ピーリー・ライースが言うところのヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクの実態がどのようなものか具体的に把握しにくい。ヒドゥル・イルヤースとりわけアル・ハディルは植物の新生や水にかかわり、聖ゲオルギオス信仰にも関連し、船乗りたちの精神生活とも深い関係があったとされる聖者であり、人々の祈りの対象であった [家島2006: 627-643、村山2007: 323-332、菅瀬2012: 5-14など]。明示的に言及されている例は少数に留まるとは言え、ヒドゥル・イルヤースにかかわる場所や建物への言及が『キターブ・バフリエ』においてなされていることはやはり興味深い事柄と言

3) なお、Ayâ Yürki / Ayâ Kirkî / Ayâ Kirâki などの表現は927年本系 Bağdat337 写本本文では例は無い。ただ、付図のみに現れるものとして第16章 (Şûsam/Samos 島) の付図 [21b] に Aya Yürak (Aya Yürki?) が見えるが、これは Şûsam/Samos 島ではなく対岸のアナトリア側 (現 Kuşadası 近傍) に描かれているものである。

えよう。インド洋世界やシリア地方、中央アジアなど他の地域に関しても、学問的な関心の有りようはそれぞれ異なるものの文献学的研究や現地調査の例もあることから〔家島2006：643-665、村山2007：332-344、菅瀬2012：15-55など〕、『キターブ・バフリエ』に見られるヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクの実態を考察してみることに意味があるう。

さて、ピーリー・ライースの言うヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクとは実際にはどのような姿の何を指しているのでしょうか。また、明示的に言及されている5地点はおおむね地中海とその沿岸部のうちエーゲ海を中心にした東北部に位置し、Ayâ Yûrkiなどで言及される地点も同様に地中海東北部に位置している。なぜ『キターブ・バフリエ』においてはヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクは地中海東北部でのみ言及されているのでしょうか。これらの疑問を念頭に、『キターブ・バフリエ』の叙述内容を实地に確かめるべく、2017年8月末から9月中旬にかけてギリシアで現地調査を行なった。この現地調査では Ayasofya2612写本に明示的に表れる5地点のうちギリシア所在の3地点を不十分ながら实地にみることができた。フォチャ（トルコ）は1997年9月に現地に立ち寄ったことがあるが〔新谷1998：119-126〕、ごく短時間の目視に留まり、またすでに時間が経過していることもあるため、レバノンのトリポリ近傍の地点（未見）とあわせ、今後機会を得て改めて現地調査を行いたいと考えている。（これら2地点については、考察のうえでの参考として『キターブ・バフリエ』における叙述内容をギリシアの3地点と同様の形式で下に示すことにする。）このような事情もあり、小稿は、『キターブ・バフリエ』の叙述を踏まえつつ、ギリシアで行なったごく短期間の調査の際に知り得た現地の情報を心覚えに記すささやかな報告にとどまることを予めご了解いただきたい。

以下、まず『キターブ・バフリエ』932年本系 Ayasofya2612写本と927年本系 Bağdat337写本に基づきながら関係部分の記述を確かめ、そのうち現地調査の概略を述べながら『キターブ・バフリエ』におけるヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクの実態を考えたい。

## 1 『キターブ・バフリエ』に見えるヒドゥル・イルヤース あるいはヒドゥル・イルヤースルク

上で述べた通り『キターブ・バフリエ』の932年本系 Ayasofya2612写本では明示的にヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクが言及されている箇所は5例を確認できる。それぞれ関係部分を示す。また932年本と対比する意味で参考として927年本系 Bağdat337写本に

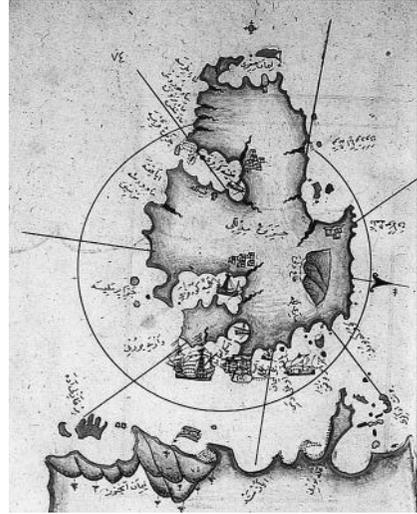
基づいて明示的にヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクが言及されている4例を932年本の該当箇所に対応させながら示す。Bağdat337写本ではプレヴェザ南方・レフカダ島近傍のヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクについては言及が無い。

① Midillü 島 (Μυτιλήνη/Mytilini/Λέσβος/Lesvos)

932年本: 第10章 Midillü [Ayasofya2612/68a12-69a4]

本章はミディッリュ Midillü<sup>4)</sup> という島を説明する。

… (中略) …カライナ [カラニヤ?] の説明 Dar bayân-i Qalayna [Qalanya?]<sup>5)</sup>。このカライナ<sup>5)</sup> は大きな湾である。その湾の入口から内側の最奥部は18マイルである。しかし ammâ, この湾の内法は回ってまたこの湾の入口に来るまで44マイルである。しかし walî, この入口には浅瀬がある。その浅瀬の或るところは見える。或るところは見えない。十分に注意されたい。例えば mathalan, この湾の入口にカルビヤ Qarbiya<sup>6)</sup> という小島がある。その小島の西側は浅瀬である。注意せよ。しかし ammâ, 東側は深い。そ



Ayasofya2612/73b [部分]

こで<sup>7)</sup> この東側から中に入る。そして決してこの東側から離れて進んではならない、その浅瀬を過ぎるまでは。その後はどこへ行こうと望もうとも [そのまま] 行く。錨を降ろす。いくらかの船はその浅瀬から中に入った後、先に述べた東側にファスリカ Faslika<sup>8)</sup> という村々があり、その村々に向って行く。錨を降ろす。この場所の目印はそこに崩れた塔があることである。その塔に対面して停泊する。しかし ammâ, 漕ぎ船 chekdürür gemiler は上述の浅瀬の中に入った後、西側にヒドゥル・イルヤース Hıdır [Khidr] -İlyâs という小島<sup>9)</sup> があり、その小島の北側を回って入り江に停泊する。この小島には教会堂がある。その教会堂はアーヤー・ユールキー Ayâ Yürki

4) Μυτιλήνη/Mytilini /Λέσβος /Lesvos 島。11世紀末にセルジューク朝の手に落ちた後13世紀前半に東ローマ帝国の支配に入った。14世紀半ばにジェノヴァ人の商家に与えられて交易拠点として重要な役割を果たしたが、1462年から20世紀初頭までオスマン朝の支配下にあった。中心都市は東部海岸の Mytilini。

5) Καλλονής/Kallonis 湾。

6) Kallonis 湾入り口に位置する Γάρμιας/Garmias 島であろう。

7) eyle eyle olsa と eyle が重複して書かれている。

8) 不詳。Ökte1988: 303では Fesilge と写す。

9) Άγιος Γεώργιος/Agios Georgios 島と思われる。

と言う。しかし wali、そこに岩がある。見えない。注意せねばならない。さて imdi、もし沖合からこの湾の入口を完全に知りたいと思うならば、その目印は次の通りである。沖から到着する時、遠くから山の中に低い土地が見える。或る者たちはその低いところを湾口と考える。近付くとその低いところが高くなる。[それでは] 湾口が分からない。しかし ammâ、本来の航路は次の通りである。この低いところの西にある高いところに真っ直ぐに進めば、その湾口が完全に分かり、前にある小島もはっきりと現われる。そしてその東側から中に入る。… (後略) …

927年本：第9章 Midillü [Bağdat337/12b3-13]

本章はミディリユ Midillü 島とその向かい側にあるアナドル海岸を説明する。

… (中略) …このカランヤ Qalanya [Qalayna?] 湾の姿は大きな湾である。その湾の中へ18マイル入っていく。その湾の入り口に小島が一つある。名をカールビーヤ Qârbiya と言う。この小島の西側は浅瀬である。東側は深い。大型の船が入る。しかし wali、上述のハルサ Harsa 村と上述のカランヤの入り口の間には、いくつかの真水の川がある。最初にフーヴシュ Khûwush [フルーシュ Khurûsh? (Nuruosmaniye Kütüphanesi 2990: 14a21)] は大きな川である。目印はプラタナスの繁る谷川である [ことだ]。

さて ba'da-hu、上述の [また別の?] 川をプーダン Pûdan と言う。柳の繁る谷川である。

さて ba'da-hu、[また別の] 川 [があり、それ] をマーカーリー Mâqârî と言う。兩岸はバークである。夏も冬もずっと水をたたえ、流れている。何本かの支流 ayaqları が海に注ぐ。しかし ammâ、上述のカランヤの中に入るならば、ヒドゥル・イルヤース Hıdır [Khidr] -İlyâs の小島の前で停泊できる。目印はこうである。その島の上に教会堂があるのだ。名はアヤー・ユールキー Ayâ Yürki と言う。もしファラカ Falaka に到着するならば [目印は廃墟となった塔 burghush があることであり、その塔の前に到着するならば :Nuruosmaniye Kütüphanesi 2997/19b2-3] 錨を降ろす。この湾 qo[r] foz の中、最奥部にカランヤと言う流れる川のある村がある。ダパーダキー Dapâdaki と言う、プラタナスの繁った谷川がある。水車が回っている。ダイダイが実り、レモンの実る [limânlu?] ところである。

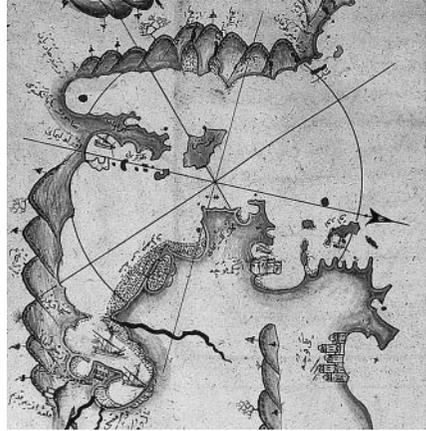
さて wa ba'da-hu、このカランヤ湾の入り口からカラムヤ Kalamya 湾へは… (後略) …

## ② Focha/Foça

932年本：第11章 [Ayasofya2612/75a4-76a3]

本章は両フォチャ城 *Focha qal'aları* とイズミール *İzmir* とカラ・ブルン *Qara Burun*<sup>10)</sup> の海岸を説明 [する]。

… (中略) …さて *wa ba'da-hu*、この岬の西北に岬がある。その岬をタシュルク *Tashlıq* 岬という。というのは、この岬の近くから粉碾き石 *değirmen tashı* を切り出しているからである。その石を切り出す岬を西に回るとウズン・エン *Uzun Eñ* という北向きの長い岬がある。この岬と先のタシュルク岬の間に入り江がある。この入り江は南風の日には漕ぎ船 *chekdürür gemiler* には良い停泊地である。その入り江と先のウズン・エン岬を南西の方に回ると小島がある。その小島とアナドルの海岸の間はカユクが停泊できる場所である。この小島を



Ayasofya2612/80a [部分]

出て、エスキ・フォチャ *Eski Focha*<sup>11)</sup> の方へ回ると、アナドル海岸に近い小島がある。その小島とアナドルの間は浅瀬である。この小島のエスキ・フォチャ側に低い岬がある。その岬の端は浅瀬である。その浅瀬の岬を、さらにフォチャ側に回ると、カワク *Qawaq*<sup>12)</sup> という入り江がある。ここは浅瀬のところ *sighlu yerler* である。しかし *walî*、漕ぎ船 *chekdürür gemiler* には良い停泊地である。もしそこで停泊せず、正面のオラク *Oraq*<sup>13)</sup> 島で停泊するならば、このオラク島の中央部にアナドルに面した小島がある。その小島とオラク島の間を船は通らない。浅瀬である。さて *imdi*、このオラク島の元来の停泊地はまさにこれであり、この小島とオラク島の低い岬の間に停泊するのである。この島をオラク島という理由は、その島の南側に丁度鎌 *orag* のような低い砂地があるからである。その砂地の一方から一方までは僅か2尋のところである。鎌のように曲っている。しかし *ammâ*、その岬の端に至るまでに [*? anuñ tâ burinuñ ujunda*] 少々広いところがある。そこも低い砂地である。その、鎌のような岬以外のところは灰色の丘である。

さて *wa ba'da-hu*、もしこのオラク島から先のエスキ・フォチャの前に行こうとすれば、この

10) イズミール西方で北に突き出した半島及びその首邑の名称。

11) 旧フォチャの意。現フォチャ *Foça*。İzmir の西北約50kmの海岸に位置する。古代 *Phocaea* の地。東北約10kmの海岸に *Yeni Foça* (文字通りには新フォチャ) がある。この一帯は14世紀サルハン君侯国の影響下に入り、ジェノヴァ人がフォチャに拠点を得て明礬交易に携わった。フォチャは15世紀半ばにオスマン朝の支配下に置かれた。

12) 不詳。Ökte1988では *Focha* の北の *Orak* 島の対岸の小港・村とする [Ökte1988: 327注265]。

13) フォチャ西北沖合いの *Orak* 島。

間における、アナドルから来ている岬と正面にある小島の間をバルチャは通らない。浅瀬である。しかし ammâ、ガレー船と荷を積んだイグリバル ighribar 船は通れる。この瀬戸はヒドウル・イルヤース Hıdır [Khıdır] -İlyâs の瀬戸と言う。というのは、この小島に崩れた建物があって、その建物をヒドウル・イルヤースルク Hıdır [Khıdır] -İlyâslıq と言うからである。しかし ammâ、大型のバルチャがもしたまたまこのエスキ・フォチャへ行くことがあれば、このヒドウル・イルヤース島 Hıdır [Khıdır] -İlyâs Adası の南側から出入りする。ここは大変に深い。それから andan soñra、このエスキ・フォチャ港は天然の比類ない港である。… (後略) …

927年本：第10章 [Bağdat337/14b1-9]

本章は両フォチャ Fochalar の海岸とイズミール İzmîr の海岸の詳細を説明する。

このフォチャ両城については次のように語られている。エスキ・フォチャ Eski Focha 城をヴェネディク Wenedik [ヴェネツィア] 商人たちがたまたま ittifaqî 建設し、イエニ・フォチャ Yeñi Focha をジェネヴィーズ Jeniwîz [ジェノヴァ] 商人たちが造らせたと言う。すなわち、アナドル海岸で織物やその他の商品を持って来た時に関税の収入が彼らのものとなり、またそれらの港でゆったりと wus‘at üzerine [?] 安楽に過ごす huđûr et- [?] ためである。しかし ammâ、そのカラ・フォチャ Qara Focha [エスキ・フォチャ?] が建設された理由は、大きな船が到着する天然の良い港であることだ。… (中略) …しかし ammâ、この港の入口にヒドウル・イルヤース島 Hıdır [Khıdır] -İlyâs Adası という小島がある。その小島と陸地が隣接する barra muttaşil 間をマヴナほどの喫水の浅い船 şu söker gemiler [?] が通る。けれども wa illâ、あまりに大きな船は沖合側を回り込んで城の前にやってくる。上述のヒドウル・イルヤース島からイエニ・フォチャは15マイルである。このフォチャ城の前には港は無い。… (後略) …

### ③ Ayâ Mâwri/Λευκάδα/Leykada/Λευκάς/Leykas

932年本：第58章 [Ayasofya2612/162a1-162b3]

本章はアヤー・マウリー Ayâ Mâwri<sup>14)</sup> とピラヴァザ Pirawaza<sup>15)</sup> の海岸を説明する。

このアヤー・マウリー Ayâ Mawri は、ヤーンヤ Yánya<sup>16)</sup> のリワー [サンジャク] でルーメリ海岸に近いラフカーダ Lafkâda<sup>17)</sup> という山がち ʔağlu で流水のある島の端にあつて、ルーメリに面

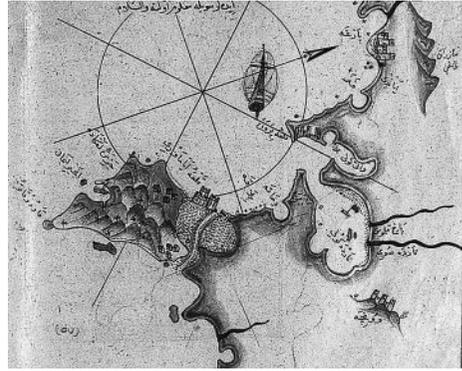
14) Λευκάδα/Leykada/Λευκάς/Leykas 島北端に位置する町。Αγία Μαύρα/Aya-Mavra/ Santa Maura と称される。

15) Πρεβέζα/Preveza。

16) ギリシア西部の町 Ιωάννινα/Ioannina。Preveza の北方約80km に位置する。トルコ語名は Yanya。

17) Λευκάδα/Leykada /Λευκάς/Leykas 島。

した城である。この城は、低い土地にある。両側に橋を有する。丁度あたかも島のように見える。というのは、この城と上述のラフカーダ島の間は、瀬戸のようであるからである。海が満潮 qarqin になると [海水が] 入ってくる。また引いて行く。中央部に岩 yerlü kaya がある。この岩 kaya をピラーカ pilâqa<sup>18)</sup> という。それから wa andan soñra、上述の城とルーメリの間は、瀬戸である。その瀬戸を船が通る。この瀬戸の上に、城は、ルーメリに渡るための吊り橋を有し



Ayasofya2612/163b [部分]

ている。船が通る時は橋を上げて、吊るしておく。船が通るとまたもとのところに下ろす。この橋の下にある瀬戸の他に、ルーメリ側で2箇所に瀬戸がある。しかし ammâ、それらを船は通らない。浅瀬である。[浅瀬の瀬戸と瀬戸の] 間に杭が打たれている。泥で一杯である、道ができるように。橋を東南に過ぎると、湖のような海がある。その海の一方はルーメリである。もう一方はラフカーダ島である。また [狭まったところに] 到着する。それも瀬戸になっている。この瀬戸をヒドゥル・イルヤース Hıdır [Khidr] -İlyâs の瀬戸という。ルーメリ側にある切り株のようなずんぐりした kütük 岬をカーヴ・フィガールー Qâwu Fighâlû という。このカーヴ・フィガールーから10マイル程東南側で、ルーメリに近い黒い島の上に、荒れた教会堂がある。… (後略) …

927年本：第53章 [Bağdat337/56a-56b]

本章は Ayna Bakhtü [İnebahtü/Ναύπακτος/Naypaktos/Lepanto] の海岸を説明する。

(ヒドゥル・イルヤースないしはヒドゥル・イルヤースルクへの直接の言及は無い。)

#### ④ Shâm Tarabûlûsi

932年本：第174章 [Ayasofya2612/370a1-370b15]<sup>19)</sup>

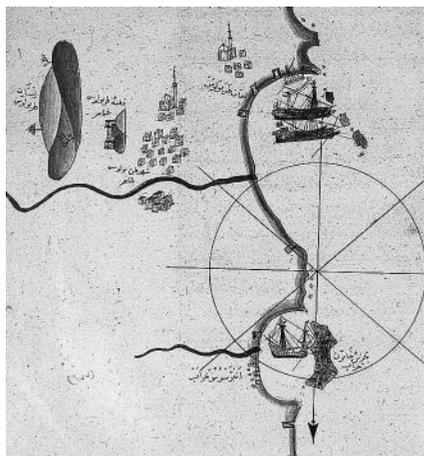
本章はシャームのタラブルース Shâm Tarabûlûsi<sup>20)</sup> を説明する。

18) plaka. 海中の大きな平石 [Kahane & Tietze1958: 559]。

19) 以下第174章の訳文は新谷2015: 99-100で示した訳文を一部修正したものである。

20) Tarābulus al-Shām/Tripoli. 「3都市」を意味する名は、かつてこの地で Tyros 人, Sidon 人, Arados 人が住み分けていたことに因む。紀元後7世紀にムスリムに征服され、以後交易や手工業で知られる港湾都市である。

沖から行く時のこのタラブルースの目印はこうである。その東北側に高い山<sup>21)</sup>がある。その山は険しく、また丸い *değirmi*<sup>22)</sup> 山である。その山の西南側に今述べたタラブルースがある。さて *imdi*、タラブルースの元来の城 *aşl qal'ası*<sup>23)</sup> は高いところである。しかし *ammâ*、町 *shahr* は低く平坦なところにあつて、バグとバフチャの多い美しい町 *khûb shahr* である。その町の中央を大きな川 *şu*<sup>24)</sup> が流れる。来る。海に注ぎ込む。これは結構な真水 *khûb tatlu şu* である。またこの町から海岸は3マイルである。この3マイルの間は、美しいチューリップの咲く土地である。しかし *ammâ*、



Ayasofya2612/371a [部分]

町の正面の海岸に二つの塔 *burjlar* がある。その塔は港を監視している。それらの塔の前に岩礁 *dökündü* で形成された小港がある。その小港へイグリブ *ighribler*<sup>25)</sup> と小型の船が入る。大型のバルチャは沖で停泊する。例えば *mathalan*、この小港の正面に三つの小島がある。それらの小島の南側からこの港へ行くのは容易である。もし、すべての島々の北側から入るならば、その「一番北側の？」島から大索2本分の長さ遠ざかって進むべし。浅瀬になっているのだ。しかし *walî*、この途中で、後で、引き綱を手繰って進む<sup>26)</sup> 必要がある。というのは、低い「浅い」ところを通って行ける *alchaqdan warulur* からである。もし小型の船で行くならば、ヒドゥル・イルヤース *Hıdır [Khıdr] -İlyâs* の小島が右側になり、もう一つの島が左側になる。これら二つの島の間の深さは9スパンである。もし、大型の船で行くならば、それらの三つの島々を左側に取り、

った。12世紀に十字軍に占領されたが1289年朝マムルーク朝のもとでイスラムの手に奪い返された。16世紀前半にオスマン朝の支配下に入り、シリア内陸部諸都市の外港の役割を果たした。第一次世界大戦後レバノンの他の地域とともにフランスの委任統治下に入った。

21) Qurnet as-Saudâ' 山 (3086m) か。

22) Ökte1988: 1557では「丸い」と解しつつ、補注で「あるいは「四角の」の意。değirmiは丸あるいは四角の形で平たいものを意味する」と述べる。

23) Saint-Gilles Citadelとして知られる城砦を指すのであろうか。Saint-Gillesの要塞はRaimond de Saint-Gilles (1042-1105年)の創建であり、Abû 'Alî川を見下ろす高台に聳える。

24) Abû 'Alî川のことであろう。レバノン山地に発して北流し、Tripoliを抜けて地中海に注ぐ。

25) この言葉は元来漁網と小型船の両義を有し、バルカン方面の言語では漁網の意が、西方の言語では小型船の意を伝えている [Kahane & Tietze1958: 503-504]。ここでは明らかに小型船の意。

26) tonaz etmek とあるが tonoz ekmek に同じ [Kahane & Tietze1958: 584-585]。

— 右側に黒い小島がある<sup>27)</sup>。その小島はちょうどガレー船に似ている。— このガレー船のような島を右側に取り、中に入る。入った瀬戸は「水深」4尋である。しかし wa illâ, 底は岩礁が多い tashludur。もし7尋の水深を通りたければ、その三つの大きな島とそのガレー船のような島の中央を三つの部分にすべし。[三分の] 二の部分が必要な三つの島の方に、[三分の] 一の部分はそのガレー船のような小島「の方」に残るようにすべし。この通行路 tarîq は「水深」7尋である。もし南側から来る時は、AWCHLK<sup>28)</sup> 岬へ錨を降ろすならば、4尋の水深に降ろすべし。良い投錨地であるのだ。また帆を上げて来ることも出来る。かく知られるべし Shöyle biline。以上。

927年本：第104章 Shâm Tarâblûsu [Bağdat337/136b1-14]

本章はシャームのタラブルースの詳細を説明する。

このシャームのタラブルースは、平原にあってバーグとバーグチャがあり、ダイダイとレモンの実る美しい草地を持つカサバである。カサバの真ん中に優美な薔薇水のような川が流れる。その川の河口部は流れて海に注ぐ。町 shahr から海岸までは3マイルである。この3マイルの間はチューリップの園である。チューリップの時節にはまことに見物となり、[町に] 人はいなくなる。

さて ba'da-hu、タラブルースの港には二つの塔がある。港を監視している。その塔に対面して沖に三つの島々がある。その島々の南側で港に入るのは容易である。もし北側から入るならば北側にある島の岬は浅瀬である。大索2本分の長さだけ島から遠ざかって進むべし。そうしたら eyle [olsa] そのあと引き綱を手繰って進む tonoz eyle- 必要がある。もし小さい船で到着するならば、ヒドゥル・イルヤース島 Khidr [Khidr] -İlyâs Adası を右側取る。もう一つの ol [bir] 島が左側に来る。両者の間は19スパンの水深である。もし大型の船で到着することになれば、その三つの島を左側に置く。右側には黒い小島が来る。ちょうどガレー船に似ている。そして、小島と三つの島々の中央から中へと入る。4尋の水深である。しかし wali, 底は岩がちである。もし7尋の水深を通りたければ、三つの大きな島とそのガレー船のような島の間を三つの部分に分ける。二つの部分が大きな島々に、一つの部分が小さな島に残るようにする。良

27) Ayasofya2612の付図 [371a] では確認できないが、TY6605の付図 [314a] に細長い小島が描かれている。

28) Ökte1988: 1559では Uçulcağız と、また An2002: 553では Uçulahcız と転写されているが、写本による異同もあり、名称、場所の特定が難しい。下に見る927年本 Bağdat337写本 [136b12] や Nuruosmaniye Kütüphanesi 2990写本 [128a12]、同2997写本 [172a12] では AWJWALHJR とあり、Awj al-Hajar (石の頂?) などと読むこともできようか。

い通航路である。しかし ammâ、パルターラ Parûtâra [?] の北東側にある岬は浅瀬である。もし南側から来た時に、AWJWALHJR [?注28参照] の岬へ錨を降ろすならば4尋 [の水深のところ] に降ろす。しかし ammâ、北側から入らねばならないとなればその三つの島々を右側取る。しかし wa likin、北の岬は浅瀬である。浅瀬のところを大索2本分の長さ沖へ出る。港の前にある塔が見えるほどにその浅瀬を避けて通るべし。… (後略) …

### ⑤ Değirmenlik

932年本：第201章 [Ayasofya2612/413b1-414a14]

本章はデイルメンリク Değirmenlik<sup>29)</sup> という名の島を説明する。

この島の周囲は80マイルである。地中海から来る礪白の石はこの島から来る。この島では一種の粘土 kil<sup>30)</sup> を産する。その島の人々はこの粘土を石礪の代わりに使っている。しかし ammâ、この島の沖から行く時の目印はこうである。即ち、それは三つの部分 bölük に見える。中央にあるものはすべての内で最も高い。もしたまたまこの島へ行きたいと思えば、この島の元来の有名な aṣl ba-nâm 港は、この島の西北側にある天然の港である。その港の北にのびている岬に非常に小さい owajuq [= ufajuq] 小島がいくつかある。それらの小島から港の岬は1マイルである。この岬から大索半分の長さ離れて進むべし。さらに、中へと港に入ったあと左側に向きを変え、錨を降ろす。そこに教会堂がある。その教会堂の前へ大索を結ぶ。錨を東南へ向って20尋の水深に降ろす。この港の中に塔 burhûs がある。その塔から、その島の元来の城 aṣl qal'a は内陸へ2マイルほどである。その城の東北側にまた一城がある。も

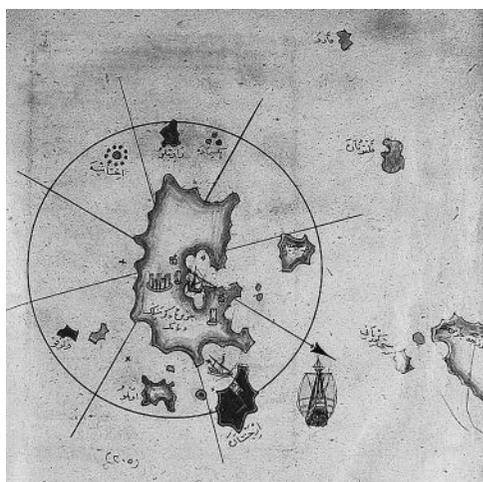


図5 Ayasofya2612/414b [部分]

29) Μήλος/Milos 島。Kyklades 諸島西南部に位置する。Ökte1988では次のように説明されている。「Milos. キクラデス諸島の火山。フランク人支配下ではヴェネツィアが治めた。1537年にはバルバロッサがここを攻撃した。後にトルコ人によって征服された。トルコ語の名前は、製粉所あるいは礪白の島の意。ピーリー・ライースの言う粘土 kil が何を指すか定かでないが、おそらくは何らかの柔らかい火山性の石あるいは灰であろう」 [Ökte1988: 1729 英訳注335]。

30) フラー土、漂布土 (吸着粘性の強い粘土で、漂白や羊毛脱脂に使われる)。

し大型の船でバナフシャ Banafsha 岬<sup>31)</sup>の方からこの島へ来る事があれば、この島を左側取る。右側には二つの島がある<sup>32)</sup>。それらの島の一つをイルジャーターラ Īrjântâra<sup>33)</sup>、もう一つをジム・ブーラ Jim Bûla<sup>34)</sup>という。これらの島に近づくと白い岬が見える。この岬はちょうど島に似ている。この白い岬が完全にそれと分かるまで ma'lûm olunja デイルメンリク島へ近づいて進むべし。というのは、その島々の方に浅瀬 sigh があるからである。先のイルジャーターラ島へ錨を降ろすならば、2方向への錨で停泊する。というのは、船が停泊するところはその瀬戸の中央であるからである。正面に荒れた教会堂がある。その教会堂をアヤー・ユールキー Ayâ Yûrki — ヒドゥル・イルヤースルク Hıdır [Khıdır] -İlyâslıq の意味である — [と言う]。小型の船が行く。その教会堂の前に停泊する。しかし ammâ、バルチャの停泊するところは9尋の水深である。またよい停泊地である。その両側から出入りできる。

さて wa ba 'da-hu、このデイルメンリク島の5マイル西北にアントゥーミール Antûmilû<sup>35)</sup> という黒く丸い島がある。その島からヤヴズジャ Yawuzja<sup>36)</sup> は5マイルである。かく知られるべし。以上。

927年本：第122章 Değirmenlik [Bağdat337/160a1-19]

本章はデイルメンリク島の詳細を説明する。

この島では粉碾き用の石 [碾石] をたくさん産する。その石が船に積み込まれる。あらゆる国々へと送り出される。今述べた石の他にこの島ではある種の粘土 kil を産する。その土地の住民は石鹼の代わりに使っている。しかし ammâ、この島の周囲は8マイルである。沖合から行くとき目印はこうである。三つの部分が見える。[他の] 二つよりも中央にあるものが高い。もし下手からこの島へやってくることになれば、今述べた島を左側取る。右側には二つの島が見える。それらの島々に近く進むと白い岬が見える。あたかも白い島に似ている。しかし ammâ、島々に近く進まぬように。と言うのは浅瀬の場所があるのだ。デイルメンリク島に近く進むべし、大索1本の長さほど。もしアルジンターラ島 Arjintâra Adası へ錨を降ろすならば、2方向に錨が必要である。船が停泊する場所は瀬戸のちょうど真ん中である。しかし ammâ、その間に

31) ペロポネソス半島東南部の Μαλέας/Maleas 岬と思われる。Milos 島の南南西約100km に位置する。

32) 西あるいは南から近づいてくる場合、ここで述べられている島の位置関係は正しいと思われる。

33) 付図から判断すると、Milos 島の北北東に位置する Κίμωλος/Kimolos 島であろう。

34) 付図から判断すると、Milos 島の東北東に位置する Πολύαιος/Polyegos 島であろう。

35) Αντίμιλος/Antimilos 島であろう。

36) Σίφνος/Sifnos 島であろう。

は *ol ara-da* 廃墟となった教会堂がある。アユー・ユールキー *Ayü Yürki* と言う。ヒドゥル・イルヤースルク *Khidır [Khidır] -İlyâşlıq* という意味になる。小さな船はその教会堂の前で停泊する。大きな船が停泊するところは 9 尋 [の水深のところ] である。良い港である。二つの入り口から出入りできる。しかし *ammâ*、デイルメンリク島の元来の有名な *aşil [aşl] ba-nâm* 港は島の北西側にある。この港の北の岬にいくつかの小さい小島がある。それらの小島から港の岬は 1 マイルである。その岬から大索半分の距離を離れて進み、そのうえで港に入って左側へ回り、錨を降ろすべし。そのあたりに教会堂がひとつある。大索を教会堂の前に結ぶ。錨を南東方向 20 尋のところ降ろす。その教会堂の上手に高い城 *qal'a* がある。人が住む [廃墟ではない]。その城はヴェネディクに属している。また一つの城が港の南側から下の平坦な場所にある。

さて *ba'da-hu*、今述べた島の南西側にいくつかの小島がある。イフティヤーナ *İkhtiyâna* と言う。それらの小島の中央にある島は高い島である。[ほかの] 二つは低い。これらはデイルメンリクから 8 マイルである。その島を北西側に回り込むとドームのような古い建物が見える。そこで飲み水が見つかる。しかし *ammâ*、デイルメンリク島の北西に向かって黒い丸い島がある。アントゥーミールー *Antûmilû* と言う。このアントゥーミールーからシーフィヌー *Şifinû* は 5 マイルである、北の方角に。この島をトルコ語を話す船乗りたち *Türk bahçileri* はヤヴズジャ島 *Yawuzja Adası* と言う。以上。続く。

## 2 現地調査から

### (1) ギリシア

#### ① レスヴォス島 / *Midillü/Mυτιλήνη/Mytilini/Λέσβος/Lesvos* : 2017年 8月29日 - 9月1日

レスヴォス島はエーゲ海東部、アナトリア半島 (トルコ) 西岸にほど近い位置にある。この島は大きく深い湾を二つ持ち、東南にあるものがイエラ湾、中央部にあるものがカロニ湾である。『キターブ・バフリエ』*Ayasofya2612* 写本でカロニ湾の入り口近辺でヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクが言及されている。ピーリー・ライースは「ヒドゥル・イルヤース *Hidır [Khidır] -İlyâs* という小島」があると述べ、

その小島には教会堂がある。その教会堂はアヤー・ユールキー *Ayâ Yürki* と言う。

[*Ayasofya2612/68b12-13*]

と続ける。

手許の地図で見るとカロニ湾の出口にあたる海上でやや北側の海岸に寄った位置に小島が確認でき、*Agios Georgios* と記されている。位置関係から見て、ピーリー・ライースの言う「ヒドゥル・イルヤース *Hidır [Khidır] -İlyâs* の小島」とはこの島であろうと思われる。

カロニ湾の最奥部に近いカロニの町から車で Agios Georgios の島に近い漁港アポスイケ Αποθήκη/Apothike の町へ向かう。この漁港の岸から500mほどの海上に Agios Georgios の小島の平坦な姿が見える。しかし岸からの目視ではこの島に教会堂その他の構造物があるかどうか判然とせず、実際に近づいて確かめるしかない。漁船を借りようとするが、風が少々強く漁を見合わせているらしく、漁師たちは船を出



してくれない。再度訪れた二日目にたまたま居合わせたひとりの漁師がまったくの好意で風の中漁船を出して島へと案内してくれた。海上に出て波のしぶきを浴びながら島に近づくと、ほどなくこの島に簡素な教会堂があることが分かる。アポスイケの町とは逆の側の浅瀬にごく簡単な船着場があり、そこから膝まで水につかりながら徒歩で陸に上がり、岩が散在する平坦な草地に出る。この小島は無人の島で、現在羊が数頭放し飼いにされているだけのようだ。西の端に近い辺りに小さな教会堂があり、そこへ向かう。

教会堂は幅3m奥行き5mほどの建物で、扉は施錠されておらず、扉を開けると正面の壁の中央には竜を退治する聖ゲオルギオスの画像（イコン）が置かれ、その周囲にも多数のイコンが飾られており、その他の設えも行われ、現在も折に触れて人の出入りがあるように感じられた。この教会堂の現在の建物が何時頃に起源を持つのか確かめることが出来なかったが、見たところこれ自体はそれほど古いものではないと思われる。これがピーリー・ライースの言うヒドゥ



Agios Georgios 島（中央）を望む



Agios Georgios 教会堂を望む



Agios Georgios 教会堂



Agios Georgios 教会堂内部

ル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルク、即ちアヤー・ユールキーの教会堂の後の姿に当たるのであろう。そしてこの教会堂がこの小島の名の由来となっているのであろう。因みにこの小島の教会堂とは反対方向の岸には四角錐の形をした石造りの白い構築物があり、湾の出入り口の瀬戸を通航する船の目標となっているように思われる。

②レフカダ島 Ayâ Mâwri/Λευκάδα/Leykada/Λευκάς/Leykas : 2017年9月2日 - 5日

プレヴェザはギリシア西部に位置する Αμβράκκος/Amvrakikos 湾の西端に位置し、この湾がイオニア海に開く湾口近くで湾の奥（東方）に面して開けた港町である。プレヴェザを出発して湾口を南北に横切る海底トンネルをくぐって湾の南側に出て、さらに海岸沿いの道を南西方面に進むと浅い瀬戸を越えてレフカダ島に繋がる海上の道が現れる。これを越えるとレフカダ島の中心都市・港町レフカダである。『キターブ・バフリエ』Ayasofya2612写本では、陸地側にレフカダ島と相対する城砦がありレフカダ島との間は浅瀬の瀬戸になっていることを説明したのち、

この瀬戸をヒドゥル・イルヤース Hıdır [Khıdr] -İlyâs の瀬戸という。ルーメリ側にある切り株のようなずんぐりした kütük 岬をカーヴ・フィガールー Qâwu Fighâlû という。

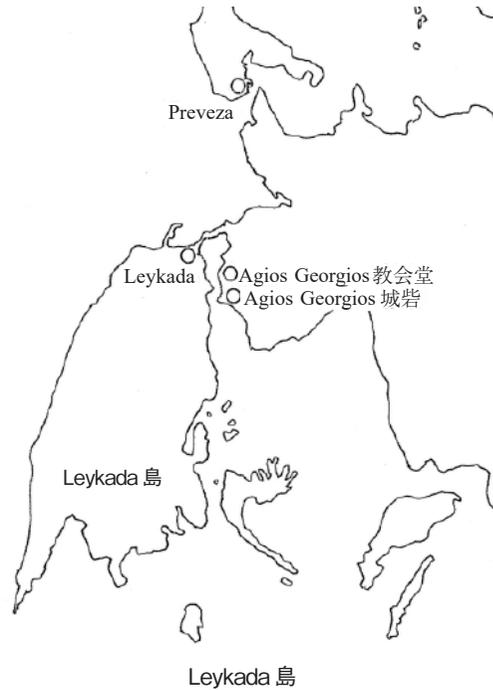
[Ayasofya2612/162a15-162b1]

と述べる。

現在もプレヴェザの南の陸地とレフカダ島との間の瀬戸の北部はラグーンが広がる浅い海であり、その南は東西0.5ないし2km程度、南北5km程度の瀬戸になっている。ピーリー・ライースが説明するところと現在もおおむね変わりはないようだが、ラグーンから南北に走る瀬戸へと繋がる辺りの様子は時間の経過により変化している可能性がある。ピーリー・ライースはこ



Leykada の町へ通じる海上の道



ここでは特定の施設などではなく、瀬戸自体をヒドゥル・イルヤースと呼んでいるが、現在の地図資料を参照するとこの瀬戸の東側、即ちプレヴェザに至る陸地側のごく海岸に近いところに「Agios Georgios 教会堂」、さらにその教会堂にほど近い地点に「Agios Georgios 城砦」という表示があり、これらを確認すべく車を走らせる。

「Agios Georgios 教会堂」は瀬戸の海岸沿いの車道から小麦（牧草？）畑を歩いて数分の小さ



Leykada 島東北岸のラグーン



ギリシア本土（手前）と Leykada 島



Agios Georgios 教会堂



Agios Georgios 教会堂内部

な岬に瀬戸を望むように位置している。やや小高い岬であり、建物の周囲の灌木を除けば瀬戸を通る船からも教会堂の姿が望めるような位置になろう。幅5m奥行8m程度でそれほど古い建物ではない。鍵はかかっておらず、中に入ると手前側のやや広い空間と奥側の狭い空間が人の背丈ほどの壁で仕切られており、手前の空間の一つの壁には竜を退治する聖ゲオルギオスの画像が安置され、仕切りの壁にも多数のイコンが飾られている。またその他の設えも行われ、折にふれて祈りに使用されているように思われた。この教会堂（の前身）が古くからあるものとするれば、この教会堂にちなんでこの瀬戸が聖ゲオルギオスの瀬戸即ちヒドゥル・イルヤースの瀬戸と呼ばれた可能性があるだろう。

また、この教会堂からさらに車で5分程海岸沿いの道を南へ進み Πλαγιά/Plagia の村を抜けると標高60m程の小高い岬の上に「Agios Georgios 城砦」(Plagia 城)がある。この城砦はレフカダ島と陸の間を南北に通る瀬戸を望む絶好の位置にある。すでにおおかた崩れており、外壁を残



Agios Georgios の城砦



Agios Georgios の城砦から南を望む

して内部は殆ど形をとどめていない。外壁の上部に登って瀬戸を見下ろすと北にはラグーンとレフカダの街と港が見え、南を望むとイサキ Iθάκη/Ithaki 島方面へとつながる穏やかな海が広がる。この城砦が瀬戸の物見、守りとして有用であったことが容易に推察される。ただし、この城砦はピーリー・ライース生存当時のものではなく『キターブ・バフリエ』にも記述は無い。オスマン朝支配時代の19世紀初頭の建設とも伝えられるようだが、その位置や地形に鑑みてそれ以前から原型となる何らかの建築物があったとしても不思議ではないだろう。

### ③ミロス島 Değirmenlik/Μήλος/Milos : 2017年9月7日-11日

ミロス島は、アテネ沖合からクレタ島にかけて東南方向に広がるキクラデス Κυκλάδες/Kyklades 諸島の西南部に位置し、アテネ（ピレウス Πειραιάς/Pireas 港）から4-5時間の航路で結ばれている。この島は北西から南東方向に深く切れ込んだミロス湾を擁しており、中心都市アダマス Αδάμας/Adamas はこの湾の東部北岸に位置する。アダマスから車で15分程度、島の東北端に位置する港町ポロニア Πολλώνια/Pollonia（アポロニア Απολλώνια/Apollonia）の東方約5kmの沖に Agios Georgios 島なる島が知られる。『キターブ・バフリエ』Ayasofya2612写本は

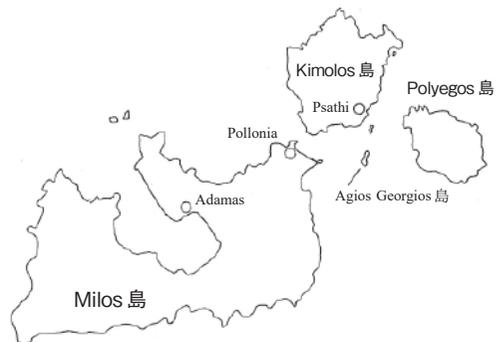
先のイルジャーントーラ島へ錨を降ろすならば、2方向への錨で停泊する。というのは、船が停泊するところはその瀬戸の中央であるからである。正面に荒れた教会堂がある。その教会堂をアヤー・ユールキー Ayâ Yûrkî — ヒドゥル・イルヤースルク Hıdır [Khıdır] -İlyâsîq の意味である — [と言う]。小型の船が行く。その教会堂の前に停泊する。

[Ayasofya2612/414a 6-10]

と述べる。この内容からはアヤー・ユールキーあるいはヒドゥル・イルヤースルクの位置はやや不明確であるが、手許の地図にはこの近辺でそれと思しき教会堂は示されていないようであ



Agios Georgios 島（中央の低い島）と Polyegos 島



Milos 島と周辺の島々



Kimolos 島



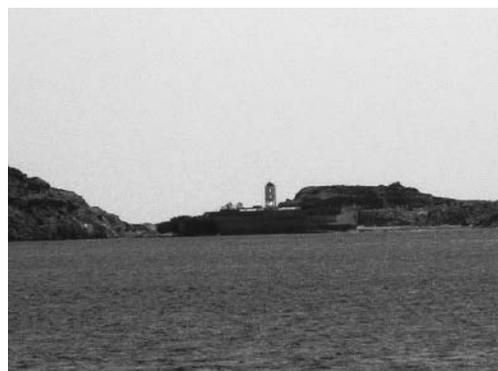
Psathi 港 (Kimolos 島)

り、この Agios Georgios 島がピーリー・ライースのいうアヤー・ユールキーあるいはヒドゥル・イルヤースルクの可能性が高いと考える。

ポロニアから Agios Georgios 島に渡って教会堂を確かめようとしたが、アダマスで得た情報では、この Agios Georgios 島は個人所有の島であり、北に位置するキモロス Κίμωλος/Kimolos 島に居住する所有者の許可が無いと上陸できないということだった。幸い所有者に連絡が付き調査の趣旨を述べて上陸の許可を求めたが、「キモロス島を留守にしており、当該の島への上陸に立ち会えないので今回は希望に沿えない」との回答であった。残念だが、諦めざるを得ない。やむなく海上からできるだけ近づいて観察・確認することにした。Agios Georgios 島に近い航路を運航する船にキモロス島のプサスイ Ψάθη/Psathi 港から乗れるのではないかとの情報があり、現地で当該の小型観光船の船主に確かめたが実際の運航経路が定かでなく、乗船を断念した。またプサスイ港で停泊中の個人所有のクルーザーをチャーターすべく所有者と交渉したが、調



Agios Georgios 教会堂 (? 中央部)



Agios Georgios 教会堂 (? 中央部)

査が目的であるにしても旅行者を私的に船に乗せることは一切禁じられている模様で、こちらの希望はかなわなかった。結局ミロス島のポロニアとキモロス島のプサスイを結ぶ定期運航のフェリーの船上から目視と写真撮影をするにとどまった。

遠方からの目視であり、また持参した小型カメラの性能の制約から明瞭には確かめられなかったが、Agios Georgios 島の中央部あたりに建築物あるいは構築物があることが分かる。この定期フェリーの船員からの情報では、Agios Georgios 島には確かに教会堂があるとのことであった。これらの建物あるいは構築物があるのはその教会堂かそれに関わるものなのではないかと思われるが、判然とせず確定的ではない。正確な調査は他日を期したい。

なお、キモロス島の南部にあってミロス島のポロニアと相対する岬が「Agios Georgios 岬」と呼ばれている。教会堂などの存在は手許の地図では確認できず、また今回は時間の制約もあり現場の踏査が出来なかった。『キターブ・バフリエ』Ayasofya2612写本の記述がややあいまいで解釈の幅があることを考慮すると、この岬あるいはその周辺にアヤー・ユールキーすなわちヒドゥル・イルヤースルの教会堂がかつて存在した可能性もあろう。この点も今後の調査の課題としておきたい。

## (2) トルコ

フォチャ近傍：1997年9月に現地を実見したことがある。その折には Ayasofya2612写本で述べられるヒドゥル・イルヤースの瀬戸やヒドゥル・イルヤースの島と思しきところを短時間目視したに留まり、近辺に特に目立った施設や構築物、遺構などは確認できなかった。ごく概括的な調査であり、またすでにかなり時が経過していることもあり、改めて調査のうえ報告の機会を得たいと考えている。

## (3) レバノン

トリポリ沖：未調査であり、遠からず調査の機会を得て報告したい。

## おわりに

ヒドゥル・イルヤースは現代の共和国トルコ語では Hızır-İlyas, Hidrellez と綴られて夏の到来を示す祝祭の名称となっている。『キターブ・バフリエ』に現れるヒドゥル・イルヤースなる語もその祝祭との関連で検討する必要があることはすでに述べた通りである。ただ、上で見た通り『キターブ・バフリエ』における実際の用例を見ると「祝祭を行う場」を強く意識した用法とは思われず、第一義的にはヒドゥル、イルヤース、あるいは聖ゲオルギオスの名前そのもの

を反映した地名、施設（とりわけ教会堂）の名称として言及されているように思われる。現地の現状もそのように感じさせる。ただし、当該の島や瀬戸、教会堂などが「祝祭を行う場」でもあった可能性を否定するものではない。

現時点で理解される場所では、『キターブ・バフリエ』932年本にヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクへの明示的な言及がある5地点のうちギリシア所在の上記3地点には、聖ゲオルギオスに関わる教会堂すなわち祈りの場が、湾の出入り口の島、あるいは島と陸地によって構成される瀬戸、またあるいはいくつかの島々によって構成される瀬戸に存在しており、瀬戸に関わりが深いという共通点が見られることになる。所在地の様相の点ではすでに先行研究によって指摘されている他地域の例とある程度一致すると言えよう。

また、ヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクに関わる上の5例の所在地は、概ねアナトリア半島を中心した地中海の東北部に偏っている。その理由としては次のような可能性が考えられよう。

- ①地中海の東北部ではヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクが実態として特有の特徴を持つものであったために特にそのように呼ばれ、このような分布として現れている。
- ②同様のものが他の地方にもあるが別の名称で呼ばれているためにそれらはヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクとして明示的に現れない。

現時点ではいずれとも判断できないが、『キターブ・バフリエ』においては、ヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクへの明示的な言及が無い場合でも *Ayâ Yûrkî* / *Ayâ Kirkî* / *Ayâ Kirâkî* あるいは *Şân* / *Şanta* などを冠する地名・施設名が多数現れている。これらを手掛かりにしてヒドゥル・イルヤースあるいはヒドゥル・イルヤースルクに相当する地点・施設存在を跡付けることができないか検討する必要がある。上の問題も、これらの名称の事例を広く検討することにより見通しが得られるように思われる。あわせて今後の課題としておきたい。

#### 参考文献

『キターブ・バフリエ』*Kitâb-i Bahrîya* 写本（本稿で主として参照している写本）

- 932年本系写本 Ayasofya2612 : Süleymaniye Camii Kütüphanesi 所蔵  
 TY6605 : İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi 所蔵  
 Hazine642 : Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 所蔵
- 927年本系写本 Bağdat337 : Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi 所蔵  
 Nuruosmaniye Kütüphanesi 2990 : Nuruosmaniye Kütüphanesi 所蔵  
 Nuruosmaniye Kütüphanesi 2997 : Nuruosmaniye Kütüphanesi 所蔵

Arı, Bülent,

2002 : (ed.) *Pîri Reis, Kitâb-ı Bahriye*, Ankara.

Erol Çalışkan, Şerife Seher,

2015 : *Türklerde Hidrellez İnanıcı : Makedonya Örneği (The Belief of Hidrellez among Turks : Macedonia Case)*, *International Journal of Science Culture and Sport (IntJSCS)*, Special Issue on the Proceedings of the 4th ISCS Conference – PART A, July 2015, pp. 380-392.

伊東一郎

1981 : バルカンにおける降雨儀礼と儀礼歌 — ドドラあるいはベペルーダ、『季刊・人類学』、第12巻第2号、講談社、59-103頁。

1982 : スラヴ人における人狼信仰、『国立民族学博物館研究報告』、第6巻4号、767-796頁。

1994 : スラヴ民衆世界における聖ゲオルギオス — イコン・儀礼・フォークロア —、聖心女子大学キリスト教文化研究所編集『東欧・ロシア — 文明の回廊』、春秋社、97-113頁。

2004 : 緑のゲオルギオス — クロアチアとスロヴェニアの儀礼から (特集 神話的言説の図像表現と解釈)、『東西南北2004』(和光大学総合文化研究所年報)、70-77頁。

2012 : ロシアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」伝説 — 巡礼霊歌・イコン・聖者伝 (I)、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第58輯 (第2分冊)、91-105頁。

2013 : ロシアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」伝説 — 巡礼霊歌・イコン・聖者伝 (II)、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第59輯 (第2分冊)、71-84頁。

2015 : ブルガリア・フォークロアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」の変容 — キリスト教伝説と民間暦 — (I)、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第61輯 (第2分冊)、73-86頁。

2017 : ブルガリア・フォークロアにおける「聖ゲオルギオスの竜退治」の変容 — キリスト教伝説と民間暦 — (II)、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第62輯、271-276頁。

Kahane, H. & R., Tietze, A.,

1958 : *The Lingua Franca in the Levant, Turkish Nautical Terms of Italian and Greek Origin*, Urbana.

Ko Seong-Jun,

2006 : 聖ゲオルギオスの奇跡伝 — イクヴィ (グルジア)、ツミンダ・ギオルギ聖堂北翼廊の壁画を中心に、『新潟県立万代島美術館研究紀要』第1号、27-37頁。

村山和之

1997 : ワワージャ、ラール、カランドル : インダス峡谷地方のシンクレティズム考 :、『和光大学人文学部紀要』、第32号、121-138頁。

2007 : 不死なる緑衣を纏う聖者の伝承と現在 — ヒドルとヒズルの世界、長澤峻編『死と来世の神話学』、言叢社、323-347頁。

Ocak, Ahmet Yaşar,

2012 : *İslâm-Türk İnançlarında Hızır Yahut Hızır-İlyas Kültü*, 4. baskı, İstanbul [1. baskı : Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü, Ankara, 1985].

Ökte, Ertuğrul Zekâi,

1988 : (ed.) *Pîri Reis, Kitâb-ı Bahriye*, 4 vols., Ankara.

新谷英治

1990 : “Kitâb-i Bahriya” の性格 — Ayasofya 2612写本本文を中心に —、『東洋史研究』、第49巻第2号、107-139頁。

1998 : トルコ人の見た地中海 — 『キターブ・バフリエ』写本研究から —、『泊園』(泊園記念会)、第37号、96-143頁。

2015: 『キターブ・バフリエ』に見えるシリア海岸、『関西大学東西学術研究所紀要』、第48輯、89-107頁。  
菅瀬晶子

1997: 『緑の男』を追って—東地中海のマール・ジルジス信仰(1)、『季刊アラブ』、第83号、16-17頁。

1998: 『緑の男』を追って—東地中海のマール・ジルジス信仰(2)、『季刊アラブ』、第84号、27-29頁。

2009: 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒—その社会とアイデンティティ』、溪水社。

2010: 『新月の夜も十字架は輝く—中東のキリスト教徒』(イスラームを知る6)、山川出版社。

2012: 『豊穡と共生への祈り—パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』(民族紛争の背景に関する地政学的研究 Vol.19)、大阪大学世界言語研究センター。

Uca, Alaattin,

2007a: Türk Toplumunda Hidrellez – I (In The Turkish Society Hidrellez Or May Sixth –I), *A.Ü. Türkiyat Araştırmaları Enstitüsü Dergisi* (Erzurum), Sayı 34, pp. 113-138.

2007b: Türk Toplumunda Hidrellez – II (In The Turkish Society Hidrellez Or May Sixth –II), *A.Ü. Türkiyat Araştırmaları Enstitüsü Dergisi* (Erzurum), Sayı 35, pp. 251-284.

Ülkekel, Cevat,

2007: *XVI. Yüzyılın Denizci bir Bilimadamı Yaşamı ve Yapıtlarıyla Piri Reis*, 3 cilt, İstanbul.

Wensinck, A. J.,

1918: *The Ocean in the Literature of the Western Semites*, (Verhandelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen te Amsterdam. Afdeeling letterkunde. Nieuwe reeks, Deel XIX, No.2), Wiesbaden (repr. 1968).

家島彦一

1991: ムスリム海民による航海安全の信仰—とくに Ibn Battûta の記録にみるヒズルとイリヤースの信仰—、『アジア・アフリカ言語文化研究』、第42号、117-135頁。

1993: 『海が創る文明—インド洋海域世界の歴史』、朝日新聞社。

2006: インド洋と地中海を結ぶ海の守護者ヒズル、家島彦一『海洋から見た歴史』、名古屋大学出版会、625-665頁。

#### 事典記事

“al-Khaḍīr”, by Wensinck, A. J., in: *Encyclopaedia of Islam, First Edition (1913-1936)*, Edited by M. Th. Houtsma, T.W. Arnold, R. Basset, R. Hartmann. Consulted online on 30 November 2017 <[http://dx.doi.org/10.1163/2214-871X\\_ei1\\_COM\\_0131](http://dx.doi.org/10.1163/2214-871X_ei1_COM_0131)> First published online: 2012 First print edition: ISBN: 9789004082656, 1913-1936.

“Ilyās”, by Wensinck, A.J. and Vajda, G., in: *Encyclopaedia of Islam, Second Edition*, Edited by: P. Bearman, Th. Bianquis, C.E. Bosworth, E. van Donzel, W.P. Heinrichs. Consulted online on 30 November 2017 <[http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912\\_islam\\_SIM\\_3543](http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_3543)> First published online: 2012 First print edition: ISBN: 9789004161214, 1960-2007.

“al-Khaḍīr (al-Khiḍr)”, by Wensinck, A.J., *ibid.*, <[http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912\\_islam\\_SIM\\_0483](http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_0483)>.

“Khiḍr-Ilyās”, by Boratav, P.N., *ibid.*, <[http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912\\_islam\\_SIM\\_4285](http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_4285)>.

“Khwādja Khidr”, by Longworth Dames, M., *ibid.*, <[http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912\\_islam\\_SIM\\_4126](http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_islam_SIM_4126)>.

“Elijah”, by Rippin, Andrew, in: *Encyclopaedia of Islam, THREE*, Edited by: Kate Fleet, Gudrun Krämer, Denis Matringe, John Nawas, Everett Rowson. Consulted online on 30 November 2017 <[http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912\\_ei3\\_COM\\_26169](http://dx.doi.org/10.1163/1573-3912_ei3_COM_26169)> First published online: 2012 First print edition: 9789004225442,

2012, 2012-2.

“Alexander”, by Renard, John, in: *Encyclopaedia of the Qur’ān*, General Editor: Jane Dammen McAuliffe, Georgetown University, Washington DC. Consulted online on 30 November 2017 <[http://dx.doi.org/10.1163/1875-3922\\_q3\\_EQSIM\\_00016](http://dx.doi.org/10.1163/1875-3922_q3_EQSIM_00016)>.

“Elijah”, by Tottoli, Roberto, *ibid.*, <[http://dx.doi.org/10.1163/1875-3922\\_q3\\_EQSIM\\_00129](http://dx.doi.org/10.1163/1875-3922_q3_EQSIM_00129)>.

“Khaḍīr/Khiḍr”, by Renard, John, *ibid.*, <[http://dx.doi.org/10.1163/1875-3922\\_q3\\_EQSIM\\_00248](http://dx.doi.org/10.1163/1875-3922_q3_EQSIM_00248)>.

“Alexander Romance”, by Harich-Schwarzbauer, Henriette (Graz) and Ott, Claudia (Berlin), in: *Brill’s New Pauly*, Antiquity volumes edited by: Hubert Cancik and , Helmuth Schneider, English Edition by: Christine F. Salazar, Classical Tradition volumes edited by: Manfred Landfester, English Edition by: Francis G. Gentry. Consulted online on 30 November 2017 <[http://dx.doi.org/10.1163/1574-9347\\_bnp\\_e113830](http://dx.doi.org/10.1163/1574-9347_bnp_e113830)> First published online: 2006 First print edition: 9789004122598, 20110510.